



TITLE:

阿波國[勝]浦郡羽ノ浦町附[近]のオルビトリーナ:石[灰]とイノセラムス層

AUTHOR(S):

江原, 眞伍

CITATION:

江原, 眞伍. 阿波國[勝]浦郡羽ノ浦町附[近]のオルビトリーナ:石[灰]とイノセラムス層. 地球 1925, 3(6): 607-609

ISSUE DATE:

1925-06-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/182879>

RIGHT:

地の聚落が出来た例があるといふ。その未開墾地のあつたのも此の長船鍛冶の殆んど全滅したのも同一の地理的要因が働いた結果であつた。

今も尙ほ岡山縣には蘭の收穫の如き勞力の必要な時季に讃岐から渡つて来る勞働者の頗る多い事實があることを浦上宗衛氏から聞いたが、

過去聚落發達の歴史には人口移動の潮流に色々の種類があつて、その一が鍛冶工業として此處に現はれ、その發達の根柢たる氣候の要因がまたその全滅を促すことになつたのは必しも偶然ではない。

阿波國勝浦郡羽ノ浦町附近のオルビトリーナ

石灰岩ミイノセラムス層

江 原 眞 伍

予は昨春勝浦川盆地踏査の際同盆地の東端なる羽ノ浦町附近に於てオルビトリーナ石灰岩及イノセラムス層を發見せり、此の石灰岩は先に大築洋之助學士が日和佐圖幅説明書に中角より中ノ庄(羽ノ浦)に連續せりと記載したるものなり、然れども中角の石灰岩は鳥の巢系統のものなること明かにして中ノ庄のものは全然其の層位を異にせり。

此の石灰岩は記者が勝浦川盆地に於て立川礫岩層と命名せる白堊紀層の基底礫岩(S. Yehara: On the Trigonia Sandstone group in the Katsuragawa basin, containing Ryosetsu plants, *Jap. Journ. Geol. and Geogr.* vol. III. (印刷中、參照))に傾石植物と共に介在するものにして兩者の間に密接の關係あり、然して此の石灰岩は黑色緻密にして時に鰐狀又は pisolitic の構造を示し檢

鏡するに石灰藻類 (*Diploporidae*) と共にオルビトリナを含有せり、此のオルビトリナは陸中國宮古白堊層のものに比して少しく其の形を異にし恐らくネオコミアンの *Orbicolina lenticularis* 又は *Orbicolina discoidea* に比し得べきものなり、更に此の石灰岩は稀に二枚貝及アムモン貝を藏する事あり。

羽ノ浦町附近にありては此の石灰岩を被覆せる頁岩中よりアムモン貝を産す、此のアムモン貝の發見者は徳島市の標本商故角一次八氏なりき、嘗て同氏が記者の下に持参したるハミートスに三種あり又矢部教授の記載せる *Phylloceras cf. infundibulum* d'Orb. ありて紀州湯淺町栖原産のものに比するに常に同一種なるのみならず岩石の性質を同じくせるに徴し高橋助教の栖原統の時代は *Phylloceras infundibulum* の指示するネオコミアンにあらざるなきか、若し果して然りとせば栖原統は記者の所謂物部川統の下部に而して吉原統は物部川統の中部に相當するものなり。

然して茲に尤も注意すべきはオルビトリナ石灰岩が領石植物層と共に礫岩中に介在する事にして羽ノ浦町の西方なる古毛附近に於て目撃するを得べし、此の事實は日本の下部白堊層は地中海相 (*Mediterranean facies*) にして北米加州の下部白堊層なるノックスビル層が北帶相 (*Boreal facies*) なるに對して極めて興味ある事實なりとすべし。

羽ノ浦町附近にありては立川礫岩層の北側即ち古毛越 (古毛—立江間の峠) の北側と水田との界に沿ひ略ぼ東西に記者の所謂阪本—沼江斷層線の通過するが爲め此の方面にトリゴニア砂岩の發達なきに反して羽ノ浦村宮倉には砂岩及礫岩を伴へる砂質頁岩ありて *Inoceramus cf. reginalis*, *Cucullaea cf. sachalinensis*, 及一種の *Echinoid* を産せり、此の和泉砂岩と同一なるべき上部白堊層は小丘を成し羽ノ浦、立江間の田甫の内に散點せり、蓋し此の地方には海岸段丘の發達せるに徴し嘗て海水の浸蝕を蒙りし當時のエロージョン、レリツクなるべし。

此の和泉砂岩層は走向東西にして北に傾き其の北邊は記者の所謂生實——沼江斷層線の延長により截斷せらる、此の和泉砂岩層は紀州金屋の鳥屋城層と關係あること明かにして此の兩者が瀬戸内海沿岸に發達せる和泉砂岩層の全部を代表するものなるか或は其の一部を代表するも

のなるかは今後の問題として興味深きものならざるべからず、記者は此の問題に關して又羽ノ浦附近の地層に對して別に詳論する機會あるべし。記者は此のイノセラムス層發見に際して羽ノ浦小學校長株木千代藏氏及同校中田訓導に負ふ所大なり茲に感謝の意を表す。

日本近海の深さ (一)

—附圖(六二二頁)參照、水路要報第四年第三號及第四號所載
小倉伸吉氏「日本近海の深さに就いて」の抜萃—

一、日本近海測量略史

日本の近海は幕末から外國船によつて要所要所が測量された。就中、英國の海軍は一八四二年頃から支那日本方面の大規模の測量を開始して主要航路及港灣の海圖を出版した。我國では一八七一年(明治四年)始めて兵部省海軍部に水路局が設けられて海岸の測量及水路に關する圖誌の刊行を行ふ様になつた。而して明治三十五年頃までには本州、四國、九州、北海道沿岸の

大部分を測量し終つた。朝鮮の沿岸の測量は明治二十八年頃から着手され大正二年頃に通り濟んだ。南西諸島は明治三十六年頃から大正二年頃までの間に、臺灣沿岸は明治二十八年頃から四十二年頃までの間に、南方諸島は明治四十四年から大正元年の間に測量した。また千島列島の大部分は明治三十六年頃から大正六年頃までの間に、樺太沿岸は明治四十一年頃から大正二年頃までの間に一通り測量された。